

単元名 季節と生物 (小学校 第4学年)

単元の目標

動物を探したり植物を育てたりしながら、動物の活動や植物の成長の様子と季節の変化に着目して、それらを関係付けて、身近な動物の活動や植物の成長との関わりを調べることを通して、それらについての理解を図り、観察、実験などに関する技能を身に付けるとともに、主に既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想する力や生物を愛護する態度、主体的に問題解決しようとする態度を育成する。

授業で働かせたい理科の見方・考え方と育成したい資質・能力

共通性・多様性の見方

活動や成長は、温かい季節、寒い季節などによって変化することに着目させる。

児童から引き出したい見方の例

- ・夏は、植物は大きく成長し、動物は活発に活動する。
- ・冬は、成長や活動が鈍くなることは同じだが、越冬の仕方は様々だ。

量的・関係的な見方

気温が変化すると、植物の成長や動物の活動が変化するのか着目させる。

児童から引き出したい見方の例

- ・季節が変わると気温も変わるよ。
- ・気温が変わることと、生物の様子が変わることは関係しているようだ。

「関係付ける」という考え方

生活経験や学習した内容と関係付けながら考える

児童から引き出したい考え方の例

- ・3年生のときに、春は生き物を見つけられたけど、冬は見られなかった。
- ・サクラの木は、毎年春には花を咲かせて、冬には葉が見られなくなるよ。

「比較する」という考え方

動物と植物の比較、種類間の比較。
季節と季節、色・形・大きさ等の比較。

児童から引き出したい考え方の例

- ・生物は、夏は活発で冬は活発でない。
- ・夏は大きさが変化し、冬はほとんど変化しない。



育成したい資質・能力



- 器具や機器を正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を分かりやすく記録する力。
- 既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想し、表現する力。
- 身近な動物や植物についての事物・現象に進んで関わり、他者と関わりながら問題解決する力。

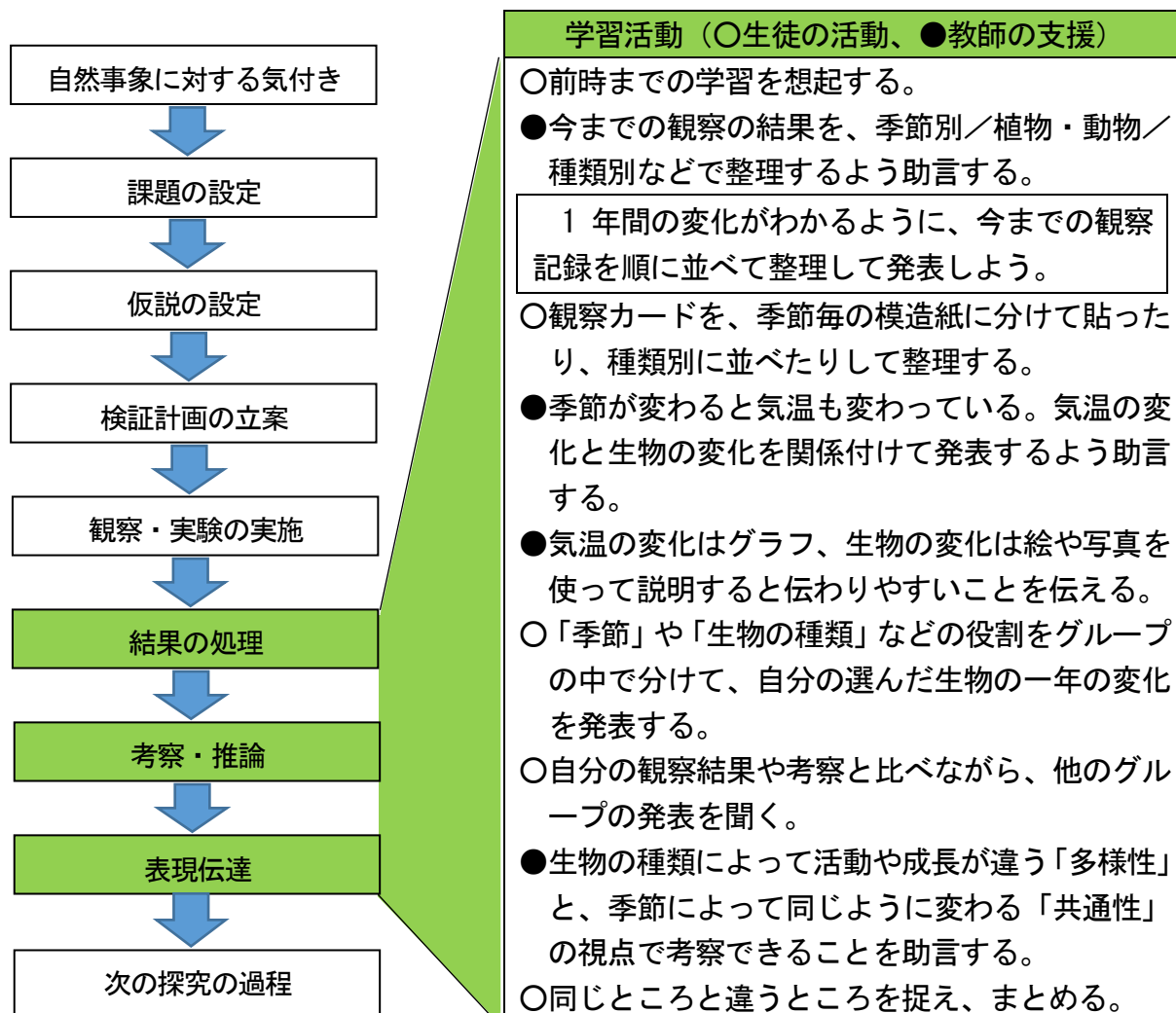
評価の計画（例）

本単元計画を 23 時間で設定した。23 時間のうち児童全員の観点別の学習状況を記録に残す場面の 6 時間（記録：○）と特徴的な児童の学習状況を残す場面の 17 時間（記録：☆）として設定した。

	評価規準（例）	重点	記録
1	①身近な動物や植物についての事物・現象に進んで関わり、他者と関わりながら問題解決しようとしている。	主① 【行動・記述】	○
2 3	①差異点や共通点を基に、問題を見だし、表現している。 ②既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想し、表現している。	思①② 【発言・記述】	○
4 5 6 7	①春の身近な動物の活動、植物の成長や、育てている植物の成長について、器具や機器を正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を分かりやすく記録している。	知① 【行動・記述】	☆
8 9 10 11	②夏の身近な動物の活動、植物の成長や、育てている植物の成長について、器具や機器を正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を分かりやすく記録している。	知② 【行動・記述】	☆
12 13	③夏の終わりの身近な動物の活動、植物の成長や、育てている植物の成長について、器具や機器を正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を分かりやすく記録している。	知③ 【行動・記述】	☆
14 15 16 17	④秋の身近な動物の活動、植物の成長や、育てている植物の成長について、器具や機器を正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を分かりやすく記録している。	知④ 【行動・記述】	☆
18 19 20	⑤冬の身近な動物の活動、植物の成長や、育てている植物の成長について、器具や機器を正しく扱いながら調べ、それらの過程や得られた結果を分かりやすく記録している。	知⑤ 【行動・記述】	☆
21 22 23	③これまで観察を行ってきて得られた結果を基に考察し、表現している。	思③ 【発言・記述】	○ 思考ツール

※記録の欄に○☆が付いていない授業においても、教師が生徒の学習状況を把握し、指導の改善に生かすことが重要である。

授業展開 第 20～21 時／23 時



板書の例 第 21 時

<p>(学) 生物の様子は、季節によってどのように変わってきたのだろう。</p>		<p>(考察)</p> <p>○同じところ 暖かい季節／かっぱつ 寒い季節／にぶい</p> <p>○ちがうところ 幼虫、卵、さなぎ 種、冬芽、球根</p>
<p>(結果)</p> <p>植物</p> <p>動物</p>	<p>(ま) 動物は、気温が上がると活発になり、下がるとにぶくなる。季節によってようすが変わる。植物は、気温が上がるとよく育ち、下がるとたねを残したり葉を落として新しい芽をつけたりする。季節によって育ち方が変わる。</p>	

主体的・対話的で深い学び

- ・観察の対象とする動物や植物については、適した対象を教師が例示したうえで、可能な限り子どもが選択できるようにする。生活科や3年時の理科の学習、生活経験なども想起させ、見通しをもって観察に臨めるようにする。
- ・単元の最終段階では、学級の実態等に応じて、小グループによる発表やジグソー法などの学習形態が考えられる。これにより、学習者同士の対話を通して多様な生物の観察結果に触れることができ、考察の深まりが期待できる。

🔍 「共通性・多様性」の見方を働かせるための工夫

- ・観察の対象とする動物や植物を子どもが選ぶことで、多様な観察結果が得られる。
- ・植物の「成長の大きさ」や動物の「見られた数」などの視点で整理することで、季節による変化の共通性が捉えられる。

🧠 「関係付ける」という考え方を働かせるための工夫

思考ツール【イメージマップ】の使用

- ・考察・推論の際に、思考ツール【イメージマップ】を使用する。
- ・イメージマップは、関係づけることを助けるツール。
- ・似たもの同士をまとめることで、「共通性・多様性」の見方にもつながる。
- ・生物は多様な方法で季節に対応しているが、植物は成長の仕方が、動物は活動の仕方が変わることは共通していることが見えてくる。

